

社長室の隅に鉢植えが三つ置いてある。今年からトマトを育てているそうだ。栽培のきっかけは「おいしいトマトが食べたい」と単純だったが、育てていると、あることに気付いた。

手を掛ければ育つ
同じ苗のトマトでも鉢

「らしや」に「だ」がある



うには仕事だけやっていても駄目。いろんなことに携わってもらいたい」と力を込める。

建設業に似つかわしくない「第一交易」という社名は、創業者である祖父の「第一に人と交わり易く」との志から生まれた。その思いは今もしっかりと受け継がれている

「11月2、3年はほってもおいても業績は大丈夫。だけど、その後は下がる。そのときに備えて、今何をやっておくべきかを考えるように役員には言っている」。目先の利益にとらわれず、先を見据える構えだ。

自作の窯を使ったピザ作りやラリー、アウトド

「どこに成長の度合いが違う。ほったらかしにしたら、上に真っすぐ伸びるが、茎は細い。手を掛ければ掛けるほどどうまく育つのは人材育成も同じかもね」。

人も好き勝手にやらせては十分な成長は見込めない。手塩にかけて面倒を見ることで、立派に育つということだろう。ただ、過保護でもない。ただ、過保護でもない。水をあげないと、自分で栄養を葉に集める。人も同じように、自分で何とかしようとして一生懸命考えることが成長の近道になる」。

今年2月、会社は創業60周年を迎えた。自身も社長になって10年以上が過ぎていく。次の世代にバトンを渡すためにも、人材育成は重要となる。こだわりたいのは「第一交易らしや」だ。「第一交易らしや」と言われるのは、プラン

第一交易社長 西能 徹氏



ド化ができていく証し。社員の質も仕事の質も高くないと、ブランド化は図れない。「第一交易に仕事を頼みたい」と言われる会社をみんなで作りたいね」。

一方で、仕事だけではいけないとは考えない。自身がPTA活動などに取り組むように、地域で活躍し、人間性を磨いてほしい。「また会いたいな」「仕事を頼みたいな」と顧客に思ってもら

よった。

課題は「新幹線後」

近い将来を見通すと、北陸新幹線の金沢開業は明るい話題だ。建物の内装を受け持つ自社にとって、駅舎整備や周辺の開発が進めば、仕事は増えていく。「今年から再来年ぐらいは楽しくなる」といいな」と顔をほころばせる。

ただし、楽観はしない。課題は「新幹線後」だ。

ア活動など多彩な趣味を持つ。「最近仕事しないようにしてる」と冗談交じりに語るが、額面通りには受け取れない。

「もちろん仕事はするけど、根を詰めていると見えるものも見えなくなる」。経営者として、常に心に余裕を持ちたいの思いだ。「本業は大事だけど、アイデアはいろんな所にある。趣味は肥やしになるんだよ」。

夏は始まったばかりだが、だいぶ日焼けしている。外で活動しているからだろう。「社長が白くてひょろっとしているよりも、頼もしくいよう」。リーダーシップの源は遊び心にあると見た。

(藤岡莞)

さいのう・とある 南砺市(旧福野町)出身。福井工科大学卒業後、設備関係の会社勤務を経て1989年第一交易入社。97年に専務、2001年1月から現職。51歳。

◆第一交易(南砺市) 1950年創業。内外装工事やリフォーム工事、土木・建築資材販売など。資本金は9800万円。2011年12月期の売上高は31億3千万円。

「節電で夏乗り切
中部経済
北陸支局長
中部経済産業
カス事業北陸
寺嶋充支局長
11月5日、新任
つで富山新聞全



富山第一
富山市の同
学連携コー
制度の研究

富山
初の

行った。中
務に精通し
するため、
関で初めて
で、研修を

普及率59%に

北陸総合通信
日発後した北陸
3月末時点のメ
テレビ(CA)
及状況によると
世帯数は前年同
約3万7千世帯
約36万3400

4年1月には東京にも「じて何通りもの支援
拠点を設け、関東での法がある。最速な方策
研究所グループ

産況
金
富山新聞の専任記者